

[調査報告]

## 鬼師の世界

——黒地：鬼福製鬼瓦所，藤浦鬼瓦 (2) ——

The World of Ogre-Tile Makers

—“Kuroji” as Fired Tiles: Onifuku-seitojo, Fujiura-onigawara (2)—

高原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: ttakashi@aichi-u.ac.jp*

### Abstract

Fujiura-onigawara is Onifuku-seitojo's offshoot. The first generation is Goro Fujiura. He was an artisan of Onifuku-seitojo. However, he was not an ordinary artisan but a blood relative of Onifuku-seitojo. The Onifuku-seitojo's family name is called "the Suzuki." The Suzuki family's genealogy is rather complicated because there are a lot of adoptions. However, Goro is descended from the Suzuki family. Moreover, his wife Yasu is also descended from the Suzuki family. Therefore, both Goro and Yasu are blood-related each other.

But a sort of tragedy happened to Onifuku-seitojo. When the second generation, Osami was 15 years old, Goro was passed away. It was a critical moment for the purpose of becoming an ogre-tile maker. Osami lost it for ever because of his father's death. Goro's skills as an ogre-tile maker were not directly transferred to the second generation in Fujiura-onigawara. This article is a story of how Osami has overcome this difficulty.

第4グループに入る鬼板屋の一つが、藤浦鬼瓦である。鬼福製鬼瓦所から独立してできた鬼板屋で、鬼福製鬼瓦所とは通常以上に深い関係にある。この第4グループは「神話を持たない鬼板屋」と命名はしたが、藤浦鬼瓦は二代目にして早、初代がいつの間にか神話化して来ている鬼板屋になっている。原因はインタビューをしたタイミングにずれが生じてしまい、あっと気が付いた時には初代を直接知っている人々が本人を始めとして亡くなっ

ていたのである。それ故、藤浦鬼瓦の物語は全体的にややバランスを欠いた構成になっている。インタビューを開始した時はまだ初代を知っている人がいたのであるが、こちらの都合でインタビューを遅らせてしまった事が、こういった結果を招いた訳である。

### (有) 藤浦鬼瓦

藤浦鬼瓦は碧南市の荒子にある。ちょうど鬼福製鬼瓦所が碧南市にあるように、碧南市の鬼板屋である。最初に藤浦鬼瓦を訪れたのが平成12年(2000年)1月24日であり、今、藤浦鬼瓦についてまとめ始めたのが平成20年9月1日からなので、ほぼ9年余りが経過している。この間に初代藤浦五郎を知っている人々がほぼ居なくなってしまった。直接の情報源は現藤浦鬼瓦の社長である二代目藤浦長実一人となっている。もう少し早ければという後悔の念はとても強い。

藤浦家はもともと百姓だったという。ところが大東亜戦争の時に戦災で岡崎にあった過去帳が焼けてしまい、四代から先が分からなくなっている。ただ伝聞から長実は次のように言う。

(過去) 帳と言うのも、西尾の古川にお寺が在るんですけども、そこも水が出て、まあ、分からなくなりました。まあ、忍者だという、岡崎のねー、「忍者だった」とか言う話もね、聞いたんですけど。

記憶の中の藤浦鬼瓦は次のような様子であった。長実の藤浦鬼瓦の原風景といったものである。それはここ三州辺りの鬼板屋の原風景と重なり合うものがある。

うちで少しずつ親父が、その一、鬼瓦をやりながら、隣に木工所が、大きな木工所がありまして、それと、まっ、兼用のような、百姓もやりながら、それもしながらというような感じで。

百姓をしながら、木工所もやりつつ、その上に、鬼瓦も作っていたのが長実の父、藤浦五郎であった。長実自身が生まれたのが昭和25年5月1日なので、原風景が<sup>おぼろげ</sup>朧気なものとして心に浮かび上がる訳である。

でも、その在所が、その一、鬼瓦でしたので、親父自身が、その、<sup>ねん</sup>年が明けているんですけど、あの、そんなに裕福な状態じゃなかったもんですから、で、木工の方も、

まっ、ほとんど、26, 20, …30年には完全、もう、鬼だけになったんですけども。その一、戦争が、…。要するに、まっ、戦争が終わった時点で、平和産業はだめでしたから。だから、その頃から、少しずつ、その一、家の、その、鬼瓦を作り始めておったみたいですけども。

この長実の話にあるように、藤浦鬼瓦の始まりがはっきり分かる。「在所が鬼瓦だったから」、と言う訳である。つまり、五郎の母親（かず）<sup>1)</sup>の実家が鬼瓦をつくる鬼板屋であり、五郎はその血縁でもって、在所へ職人になる為に入ったことになっている。長実は次のように言う。

まあ、母親の実家ということで、ええ、そんなにその、日本の景気も良くないから、それと、まあ、職というか、手に技術を付けとけばと言う事で、多分、あの、実家のほうに鬼師として行ったと思うんですけどね。

その実家でもある鬼板屋が鬼福製鬼瓦所であった。藤浦五郎は大正2年（1913年）9月24日に生まれた。そして嫁に来た「やす」の義理の叔父、鈴木福松の元へ鬼板師になるために弟子入りしたという。しかし、五郎は鈴木やすと結婚してから鬼福へ入ったのか、鬼福へ小僧として働いており職人になった五郎が鈴木家（鬼福）の娘「やす」と一緒になったのかははっきりしていない。ただ五郎とやすの子である長実が昭和25年（1950年）に誕生していることから考えると、長実は五郎が37歳の時の子ということになる。この事から職人として年が明けたのは戦前のことである。結婚して鬼福へ職人になる為に入ったというよりも、鬼福の職人であった五郎が、鬼福にいた「やす」と出会い、結婚し、独立して藤浦鬼瓦を始めたと考えるほうが筋は通るように思われる。まして戦前の日本は小卒、中卒で社会に出て働き始めるのが普通であった時代である。ただ当事者である五郎も「やす」も現在は居ないので、物語の始まりがベールに覆われている事になる。つまり神話化がここに起きている事になる。

しかし、この神話化現象に諦め切れず、平成20年9月27日に再度、藤浦鬼瓦を訪ねた。その時、長実と話しているうちに長実の妻の理子<sup>みちこ</sup>がたまたま「やす」が亡くなる少し前に、「やす」から藤浦家について何と聞き書きをしていた事が分かったのである。理子はその頃、ちょうど長実（夫）も大きな病気をしていたこともあり、藤浦家についてもっと知りたくなったのだという。そしてそのノートが何と残っていたのであった。そのノートによると、「五郎は碧校2年中退で鬼福へ入った」となっていた。後で調べたところ、当時、大正末期から昭和の初めにかけて「碧校」とは「碧南国民学校」<sup>2)</sup>の事であった。そして2年中退は歳でいうと15または16歳に当たっていた。現代で言うところ丁度中学校を卒業して鬼福へ入っ

た事になる。鬼福へ入った理由は既に五郎の兄、<sup>べんぞう</sup>勉三が鬼福へ13、4歳の頃に小僧として入っており、既に職人となっていたからである。勉三は明治42年（1909）3月7日に生まれており、五郎とは4歳年上であった。五郎は鬼福では職人となったこの勉三から鬼板の技術を習ったという。五郎が鬼福へ入った頃、勉三は20歳前後だった事になる。勉三は有能な鬼板師であったが、大東亜戦争後は鬼板師にもどらず、何かの縁で新川産業（今の（株）アイシン）へ新たに就職している。また五郎と「やす」の関係もはっきりした。二人のそれぞれの両親が勝手に決めた結婚であり、結婚式当日まで互いに顔も知らなかったという。しかし五郎と「やす」は従兄妹同士であった。つまり二人とも鈴木家の血を継いでいる事になる。また、鈴木家は元々鬼板屋ではなく、農家であり、漁師の家であった。そこへ二女「かず」の姉である長女「きよ」のもとへ福松が養子として貰われて来て、この福松が鬼板屋を始めたのである。（第1図参照）



第1図  
初代 藤浦五郎

さて、長実の両親の記憶は長実が小さい頃にさかのぼる。それが鬼瓦を作る五郎たちの働く姿であった。

母親もずっと、まあ、相手をしながら、あの一、例えば、石膏でも裏側は、母親がやって、で、あの一、まあ、コンビでやっていくような感じでしたけどね。で、そういうのは、ほとんど、小さい時から見てましたから。

まあ、それこそ、そうですねー、昔ですから、そのラジオ聞きながら、ねえ、夜遅くまで、そのー、作っていましたけどねー。

長実が語っているように、五郎は妻のやすと二人で仕事をいつもしていたようであり、他に職人は居なかったらしい。

職人は居なかったですねー。居た時代は、そのー、手作りの職人さんてのは、居なかったです。うちは。

本当に夫婦で営む家内工業的な白地屋が藤浦鬼瓦であったことがわずかな話しからではあるが、見えて来る。長実の記憶は長実自身が小学校の頃に覚えている親たちの働く姿から、親たちと長実と一緒に働く記憶へと移る。つまり頭の記憶から<sup>からだ</sup>身体の記憶へとより確かな過去がここに浮かび上がる。

そのー、やっぱりしましたよ。土打ちと言いましてね。そのー、小学校の時も、忙しい時に、学校を休んで。

あの一、まあ、土を、そのー、土練機の中に入れるんですよ。練る、それを。その、土場に行って、手伝いに行かされた事ありますから。ま、そう言う事をしながら、百姓もあったから。百姓の農家の手伝いとかが、そういう、それは昔はどこの子供も、家の手伝いってのは当たり前でしたから。

だから、そういう仕事も一緒に、それから、あの一、石膏型を詰める仕事ですね。粘土。そういう事も、小学校の高学年くらいかな、し始めたのは。

その位ですかね。まあ、中学になればほとんど、中学の後半ですけど、やっぱり仕上げまでは全部出来たって事はしてましたけどね。

そうしていた頃に行き成り五郎は亡くなったのであった。長実が中学三年生の時の出来事である。昭和40年12月22日の事であった。長実が父、五郎のことを次のように言っている。

すごい頑固な親父でしたね。うちとしてはね。頑固で、真面目な人だったと思うんですけどねえ。

その、まあ、百姓もやったり、その、百姓の事で、その指導買って言うのね。そういう事で、よく話し聞かれたりしてたみたいですけどね。

それから、信仰的なもんも、そちらの話もしたり。だから、まあ、基本的には、真面目な人だとは思いますがね。<sup>3)</sup>

鬼福の二代目、鈴木菊一にインタビューをした折に五郎について聞いてみた。しかし、菊一自身が福松の実子ではなく、鬼福の養子のため、五郎とは馴染みが薄いと言っていた。ただ、戦後、五郎は西三河 4H クラブの農業指導員として活躍していたという。また、鬼福が忙しい時に夜来て手伝っていたと話していた。(第2図参照)



第2図 碧南市西端 応仁寺 経ノ巻吹流し 藤浦五郎作

五郎が亡くなった事により、藤浦鬼瓦は二代目の長実にはバトンが引き継がれる。しかし、長実はまだ中学三年であり、実質は五郎とコンビを組んでいた母、「やす」を中心に運営されていった。長実はその頃の事を次のように話す。

あの一、その時は、僕が中学三年の時は、もう、近くのおばさんが一人と、僕のお姉さん（郷乃<sup>さとの</sup>）と、それから母親と、4人でやりましたね。

その頃からプレス製品っていうのが良く出る時代になって。

プレスものは中学ん時もありましたから、だから30年以上になりますね。30年以上になりますけど、そのプレスが、一台になり、また二台になりって事ですな一。

プレスも三台。三台くらい活動してましたからねえ。

今は二台なんですけど、結局自動化したもんですから、だから二台のが一台で。

このように藤浦鬼瓦にとって五郎の死は、会社の存在そのものを揺るがす一大出来事であった事には間違いない。しかし、藤浦鬼瓦は時代に救われたのである。五郎が亡くなった昭和40年頃からプレス機械が発明され、それまで手作りか、石膏型から起こしていた鬼板屋の世界に、新しくプレス形成された鬼瓦が登場したのである。そして五郎は亡くなる前に既にその新しいプレス機械を導入していた。中学を卒業した長実はそのままと藤浦鬼瓦に入り、母親たちと五郎が抜けた藤浦鬼瓦を盛り立てて行ったのである。

しかも、日本社会の高度成長時代とピッタリと重なり、住宅建築ブームに乗って藤浦鬼瓦は存亡の危機を乗り越え、発展して行った。それはプレス機械の台数が増えているという事実がその成長の様子を如実に物語っている。つまり、その頃は藤浦鬼瓦は五郎の時代の手作りの鬼瓦を作る白地屋から、長実の時代になって、基本的にプレス機械による鬼瓦を生産する白地屋に変容した事になる。これは質的に大きな変化が藤浦鬼瓦に起きた事を意味する。

プレス鬼(瓦)を量産することは、地元のトンネル窯との関係が生じて来る。プレス機械による瓦の大量生産と、プレス機械による鬼瓦の大量生産はセットである。そして大量生産される瓦と鬼瓦が当時はなんとトンネル窯で同時に焼成されていたと言う。長実はこの件について語ってくれた。

このトンネル窯も、その一、瓦のあれが、昔はその一本のトンネル窯で、瓦の<sup>さんがわら</sup>棧瓦<sup>4)</sup>も、役物も、鬼瓦も一本のトンネル窯で焼いていた時代が多かったんですよ。

それが、その、段々、段々、棧(瓦)専焼っていう瓦の状況になって、役物<sup>5)</sup>は違うとこで焼くようになった。鬼瓦も違う場所で焼くようになってってという。それから、その、分業化が進んでいったんですよ。

棧(瓦)だけの方がやっぱり効率が、窯の、窯の安定性がいいんですよ。だから、トンネル窯は棧だけ、役物は役物の専門のトンネル窯にしていったんですよ。で、効率が悪い鬼瓦みたいなのは、また、鬼瓦屋さんが別に鬼瓦だけで焼くようになって行ったんです。

このトンネル窯の時代はいかに効率よく、安定して焼くかの試行錯誤を繰り返していたようである。長実によると、分業化が始まって、最初にトンネル窯で、鬼瓦を専門に焼き出したのが、生万瓦工業であったという。昭和57年（1982）の頃の話である。ただ実態は棧瓦の窯が空くようになり、そこを値打ちな価格で、鬼瓦を焼いたという事らしい。

そういった中で、長実は、神仲（神谷伸達）、石英（石川英雄）、片山（片山幸一）の四人で、長実が初代社長になり、「三州鬼瓦センター」を興す。

それは、最初、販売店だけだったんですけど。それは最初、その、生万さんちゅうとこに委託して焼いてもらって、全部製品引き取って、で、配送センターを作ったんですね。鬼瓦の、その、釉薬の、瓦の鬼瓦の販売会社を作ったんですね。

ところが、2年ほどしてトンネル窯をやり始め、社長が長実から片山へ移ると、まず長実が経営方針の違いから抜け、石英が抜け、そしてやがて神仲も抜けて、最終的には三州鬼瓦センターは片山独りになったという。釉薬を使う陶器瓦系の鬼瓦の話である。

最初はトンネル窯で、棧瓦、役物も、鬼瓦も、一緒に焼いていたのに、どうして次第に、それぞれを分けて、焼成する様になって行ったのか、その経緯を長実は話してくれた。

例えば、トンネル窯で、その、鬼が一つ爆ぜた為に、台車が止まってしまう。ポーンと中で生地が煽<sup>あお</sup>って、その一、ことによって生地がポーンと爆ぜて、台車が転んでしまうんですね。そうすると、その一、ストップしちゃうでしょ。

そうするとね、大体、百万から二百万ぐらいの損害が出ますよね。そうすると、それが大変だから、もう鬼瓦は、じゃあ、製品外にしようという（瓦）メーカーさんの考えになっていったんですねー。

つまり、棧瓦と役物と、鬼瓦と一緒に同じトンネル窯で焼くと、鬼瓦は爆ぜる率がとても高いことが分かる。そして、メーカーは鬼瓦を自社の製品から外す様になったのである。

ええ、はるかに高いですよ。っていうのは、生地が瓦の、棧っていうのは一枚のこのくらいの厚み（2cm弱）ですから、そんなには、その、まあ、トンネル窯の上を乾燥炉に使って、大体一週間ぐらい取るんですよ。そうして、上薬を塗るところに来てトンネル窯に入るんですよ。そうすれば、もう、そんな爆ぜるっていう事は無かったんですよ。



ところが鬼瓦っていうのは、鬼瓦の場合は、鬼板屋さんが生地を、白地を、トンネル窯の横に並べて乾燥したんですよね。そうして、まあ、例えば、3日なり。そして、釉薬を塗って、中へ、トンネル窯に入れたんですよ。ところが、生地が爆ぜるとそういう大変、そういう金額になってしまうんですよね。

そうすると、1週間ぐらい止めないといけない。だから、耐火服を消防署から借りて来て、耐火服を借りて来てでも着て、で、瓦の中の、もう、ね、屑になったのを直ぐ、全部、きれいに掃除して、で、それからまた、新たに、台車に組んで入れるというね。

トンネル窯の中で鬼瓦が焼成中に爆ぜるといかに大変なことになるかが、長実の話から良く分かる。トンネル窯を復旧するのにかかる作業とコストと時間は無視出来ないものになってしまうのである。

僕たちも、センターやってる時に何回か、もう、そう、2年間の間に。だから…。

年間じゃあ、何回かありましたよ。だから、その社長の考え方によっては物凄く違うんです、それは。それと、鬼屋さんがきちんと乾燥した、その一、生地を入れるか入れないか。

で、今はもう鬼屋さんも大体、トンネル窯が爆ぜるということで、個人の<sup>うち</sup>家に、皆さん乾燥炉を設けて、ガスで乾燥させて、まあ、持つてくようにはなりましたけどね。その、やっぱり、そんな<sup>ぼくだい</sup>莫大な金額がね、出ますからね。そんな様な事もありますからね。

ここに黒地の鬼瓦を作る、いわゆる手作りの鬼板屋とプレスで大量生産して鬼瓦を造る白地屋との違いが見えて来る。

まあ、黒瓦と白地屋さんと二つの組合があるんですけど。で、白地屋さんの組合の方が釉薬の方に進んで行ったんですけどね。

黒瓦の人はわりと黒をやっぱ、基調として特殊の物を作って見える方が多いものだから。で、あの一、やっぱり単窯でゆっくり<sup>あぶ</sup>炙って調整する。そういうのをずーっと守ってみえると思うんですよ。

で、白地屋さんというのが、その一、やっぱり一般の並鬼っていう、いわゆる小さい

物とか、一般住宅の物を作られてるものですから、そういうところから、その、もちろん影盛も造って見えるんですけど、釉薬のトンネル窯をやり始めたっていうのがスタートですね。

ま、その、「大でんちこ」さん、「ハイオーニー」さん、「三州鬼瓦センター」さん、そういうグループが、そういうトンネルのシステムで鬼瓦を焼くようになった。また、鬼長さんっていうのは、大きなシャトル、十立米 (m) ぐらいの、そういうのをやってみえる方も在ったんですけども。

今は、その、それをまた、時流を先を、先を読んでみえるのか、鬼長さんでいきますと、今の平板瓦ですね、そういう物の役物を造られて、で、そのシャトル窯で焼いて出荷されてる、そういう鬼屋さんもあります。

だから、まあ、いろいろこう進展していくって言うんですかね。だから、その伝統的なものを守っていく、黒の組合の人。白地屋さんはある程度、敏感に先を見ながら、そういう役物とか、瓦の、その役物をやっていく。そういう変革は在りますけどね。鬼(瓦)として、その一、どういう風に将来なっていくのかは、大きな、そのちよつと岐路に立っているとは思んですけど。

話がいつの間にか藤浦鬼瓦の事から、黒地の鬼板屋と白地屋の違いへと入っていった。その大きな違いは黒地の方は基本的に手作りであるのに対し、白地屋の造る鬼瓦はプレス機械による大量生産であるということに尽きる。ただ白地屋の中にはちょうど五郎のように手作りの鬼瓦のままで出す伝統的な白地屋も一方には昔から存在する。

さて、話は藤浦鬼瓦へ戻る事になる。三州鬼瓦センターを脱退した長実はこれを機会にそれまで白地屋であった藤浦鬼瓦へ黒瓦の窯を導入し白地屋から黒地の鬼板屋へ移っていった。昭和63年(1988年)11月のことである。ただ完全な変容ではなく、二足わらじ式で、白地屋をこれまで通り続けながら、黒地の鬼瓦も焼くという鬼瓦屋である現在の藤浦鬼瓦へとなったのであった。藤浦鬼瓦はプレスの白地屋だったとはいえ、元々は、藤浦五郎が興した手作り専門の白地屋である。二代目の長実への移行が、五郎の突然の死でもって手作りから鬼瓦のプレス生産へと製品の主体が移ったところである。ちなみに白地組合には長実が16歳の時(昭和41年)に入っている。しかし、父五郎の興した手作り専門の鬼板屋という起りから言うと、手作りの黒地の鬼板屋になる下地は元々あったと言えよう。

黒瓦へと進出した理由の中の大きな要因はやはり、三州鬼瓦センター時代に長実自身が、トンネル窯とはいえ、焼成をする仕事を自ら手掛けた事が大きいと思う。それまでは普通

に白地屋としてメーカーなり、他の地元の瓦製造業者などへ白地の鬼瓦を納めていたのである。ところがトンネル窯の焼成上のトラブルが原因で、トンネル窯が棧専焼になり、鬼瓦や役物が違う場所で焼かれるという分業化が起こったこと。さらに、自ら参加していた三州鬼瓦センターの経営上の違いからセンターを降りるという状況が発生したこともある。また長実の会社へ顧客が拡大していくにつれ、実際に、まだ白地屋であるにもかかわらず、黒瓦の注文が舞い込み始め、その対応に決断を下す必要があったのも事実である。このような<sup>いきさつ</sup>経緯で、藤浦長実<sup>い</sup>は黒瓦の窯を導入したのであった。(第3図参照)



第3図 第二代 藤浦鬼瓦 藤浦長実

黒瓦の組合への加入はそれから7年も遅れる。黒地の鬼板屋として十分な実績を積んだ上での入会であった。平成7年(1995)の事である。長実<sup>い</sup>は黒瓦組合への加入メリットを次のように語ってくれた。

自分が出来ないのは黒瓦の組合さん<sup>い</sup>にお願いすれば、ね、調達していただけるっていうメリットが在りましたね。まあ、昔から白地の組合に入りましたからね。で、やっぱり勉強しないと、例えば、お客さんに、経の巻の、例えば<sup>わか</sup>解らん問題が来た時に、注文が来た時に、ここ<sup>うち</sup>辺の家の段数は何辺なんですよ。これの経の巻、お願いしますねっていうのが、十三番、尺四寸ぐら<sup>い</sup>かなって<sup>い</sup>う、そう言う事を勉強するのは、黒瓦の先輩の人に聞かないと解らないんですよ。

やっぱり、いろんな経験を持つてるのは黒の人が多いもんですから、そうすれば、梶

川さんにお聞きすれば、こうやって、こうやって、それは何なんですよって、そういうのを、ずーっと一つずつ教えて頂いて。

それとやっぱり、色んな沢山、こう、色んな物件を見ないと、体験しないと出来ないなーっと思って。

このように長実の黒瓦への進出はその背後に、強い黒瓦の需要圧力があっただと思われる。ところが、それに対応するには、単なる窯の導入だけでは不十分で、様々な種類の鬼瓦を注文に応じて説明していく実践的な知識が必要とされたのであった。ここが種類の少ないものを大量に機械で生産していく白地の世界とは全く逆の黒地の世界の難しさであり、深さなのである。

このように様々な要因が重なり合って、長実は黒地の鬼瓦の世界へ入って行ったのである。しかし、最も強い要因は、やはり、藤浦鬼瓦に対する根強い黒瓦の需要であったと思われる。なぜなら単なる興味で右から左へ移れる世界ではなく、それ相当の投資とそれに見合う利潤が望めない限り、やろうと思っても出来ない相談であろう。

ではこの根強い黒瓦の需要が藤浦鬼瓦にどうして起きたのであろうか。需要を作ろうと思ってもなかなか一夜にして獲得できるものでは決してない。そもそも五郎からまだ中学三年の長実に移った時は藤浦鬼瓦そのものが存亡の危機に在った訳であり、この需要は五郎から受け継がれたものではないことは明白である。事実、五郎の時は地元、碧南にある瓦製造業者に白地を納めることを主な仕事としていた。例外は滋賀県の業者に近江八幡型鬼瓦の白地を渡していたことだという。つまり、長実になって新しく鬼瓦の需要が開拓されて行った事は否定しようが無い。そしてそれに伴う需要圧力が藤浦鬼瓦を白地屋から黒地の鬼瓦を生産する鬼板屋へ変容させたのである。長実は藤浦鬼瓦の顧客開拓の転機をはっきりと意識しているようであった。それに関して次のように語っている。

最初、田代さんっていう、その一、田代鬼瓦工業さんっていう、そっから注文頂いて、それから、その田代さんに入るようになったんですよ。

この時、気になって、長実に「それが最初ですか、碧南から出られる」と念を押したのであった。

うん、まあ、そこが一番のポイントのところへんかなと思うんですけどね。で、田代さんそこ入れて、しばらく入れてて、でー、そーとのメーカーさん同士の付き合い

があった(株)三州石川さんっていう，そこの営業の方が山梨県の方のお客さんで，何月何日までに，ほんとは納めないかんかったのに納まらないと。自分が今付き合ってる鬼屋さんと。で，「藤浦さん，今日何とかしてくれ」っていうでね。何十個っていうのが，そんな時，十九個とりあえず，夕方の何時までに準備させてもらったんです。

で，その方が，ま，山梨県のお客さん，あと，その繋いでくれたんですけど。

それから，その方が，例えば滋賀県行ったり，それから九州に行ったり。元々，九州出身の人で，瓦屋さんに入られた営業の方でしたんで，僕を，その県外に連れてってくれるようになったんですよ。まったく，井の中の蛙<sup>かわず</sup>だったんですけどね。

このようにして長実はその顧客の難題をうまく迅速に処理し，信頼を築き上げることに成功したのである。そして次々と新しい顧客に紹介されるようになっていった。ということは長実はその都度，実績を作り，信頼度がその度毎に上がって行った事になる。

でー，それから少しずつ，県外ってのが増えたんですけどね。それで，あの一，九州の中では，そのトンネル窯，あー，問屋さんの中の営業とか，そういう人たちが，あー，そのお客さんだったかなあ。まあ，ある，「屋根工事の人とか，営業の人，紹介してあげるよ」っていう事で，紹介してもらって。で，久留米の，そのお客さん紹介して頂いて。で，また，そこから，その長崎の方へ広がって行ったんですね。九州の方へ。

関東の方は，その，先ほどの他，高浜のトンネル窯の田代さんの，まあ，営業の方が見えて，その方ともう一軒のトンネル窯の社長さんと仲良くて，トンネル窯，紹介して頂いて，それから暫らく<sup>しば</sup>出てたんですけど。トンネルじゃあ，採算が取れないからって事で，弟を紹介してもらって，埼玉県とかいろいろ増えたり。

千葉県の人とはたまたま，探して来て，鬼屋さんが僕を紹介してくれて，で付き合いが出来たり。

ま，殆んど，人の紹介ですかね。

というわけで，長実の人徳というのか，長実本人が営業活動を熱心にしたからといった，話には全くなっていない。もっぱら，偶然の連続のような紹介を通した顧客の獲得であり，しかも大半の顧客は継続しているのである。五郎と比べるとその違いが実にはっきりしてくる。

五郎は実直な職人であるのに対し、長実はある人望のある温厚な経営者といったところであろう。

茨城。茨城は三州石川さんの営業の人が、「こういう人が在るから紹介してあげるから」って紹介して頂いて、で、今のお客さんと付き合うようになったんですね。

仙台は、あれかな、こちら、あのトンネル窯があつて、で、そのトンネル窯、やまっちゃうと、その仙台的付き合いが在るからって事で、紹介して貰った感じでね。ずっと、繋いでるんですけどね。

で、長野は、一軒の、その、屋根工事屋さんですか。あれは、一級が一番上なのかな、屋根葺き屋さんは。

それとか、設計、自分が設計士されてる、設計も出来る人なので、昔からやっぱり瓦屋さんだったんですけど。で、屋根工事もやって見えるのかな。その方が、まあ、人望在るんですね、その方が、「あっこ紹介する」、「ここ紹介する」という事で、ずーっと奥、行ったんですけどね。

それと、運んでるトラックの運転手さんが、「ここ紹介する」という事でね。

こういったお客の紹介は人に頼んでやって貰える分には限りがあることを考えると、やはり、長実自身の仕事が相手に対して信用を与える何かがあると判断せざるを得ない。長実は五郎のような職人ではないので、トータルな形での仕事の完成度が高く、相手に期待以上の満足を与え、その信用が、相手に自発的に新しい顧客を紹介する行為を生み出させるのであろう。そのあたりの秘密を長実は少し語っている。注文に関する話である。

殆んどは鬼ばかりなんですけど。で、鬼があり、家紋から、まあ、暮れで行けば干支瓦えとですね。で注文が在るっていうんですが。

その中の、その、最初の頃は、その、瓦の注文も在るんですね。その、うちが瓦屋じゃないから、全部メーカーさんとか、そういうとこに渡しちゃう。

あの一、それの方がいいですよ。うちは、その、瓦までやってると大変だから。で、お互いに瓦屋さん紹介してあげた方が、お互いにいいと思うんですよ。

まあ、山梨の方に行くと、そこに出とるメーカーさんが、「藤浦さん、千葉の方のお客さん紹介して上げるわ」って。そうして、「そういう瓦屋さんじゃないから、瓦屋さんの方にいって下さいよ」、とかね。

お互いに分野をなるべくなら荒らさないようにしようかなと思ってるんですけどね。

長実の仕事のやり方の一端がこの話からも伺える。何もかも仕事を自分で取らずに、仕事の内容に応じて、他へ回して行く経営である。ところが仕事を他へ渡すと、仕事が別の形で帰って来るような好循環を形成しているように思われる。

利潤に関しても長実は言及している。ここにもやはり長実式経営の特徴が現れている。

あんまり商売は上手じゃないんですよ。実は。(笑い)

もっと、ほんとにね、がっばり儲ければいいんだけど、ま、下手だから。もう、ちょっと、上手に商売するといいかねと思うんですけどね。そうすると、もう、ちょっとした御殿が建ってるかもしれないですね。(笑い)

そうは許して貰えないかな。まあ、ほんとに、「有り難いな」と思いますけどね。その、ずっと何年も何年も付き合ってもらって言うのはね。

で、自分が身体悪くしたから、僕もあんまり県外に行かないんですよ。営業に。ほんと、電話だけのことが多くて。

それでも、ほんと一度も会った事も無いようなお客さんが、5年も、6年も、もっと続いているお客さんもあるし。

以上のように、長実が長年に渡って自ら顧客を文字通り次々に獲得することに成功し、藤浦鬼瓦の市場を地元碧南から全国へと広げていることがわかる。ただその市場の開拓の仕方が独特なのである。十分な信用・信頼関係に裏付けられた開拓なのであり、しかも長実が外へ営業努力して出て行くのではなく、逆に、その信用・信頼関係が求心力となり、新規顧客を引き付けてしまうのである。これが長実が黒瓦組合へ加入した実質的な背景である。需要が碧南の中に限られている時は白地の納入で十分足りたのである。ところが、市場が全国規模に広がると、白地ではそもそも動かすことが不可能になってくる。白から黒への転換は不可欠な要請であった。

ただ長実の信頼性はトータルな形の成果ではあるが、その核に在るのはやはり、良質の鬼瓦を商品として提供することであろう。物自体が悪ければ、信頼その物が成立しない。ところが長実自身は手作り鬼瓦の職人として育っていない。正にこれから職人として五郎から仕込まれようとする矢先に長実が中学三年の時に五郎はこの世を去ったのである。それ以降は長実は他の鬼板屋へ職人になるべく修業へ出ることも無く、生きんがためにプレス機械生産をする白地屋になっている。暫らくはプレス機械による白地の生産で間に合っていた。しかし、徐々に、プレス機械では対応できない種類の注文が来始めたのである。

僕が商売して、もう、その、し始めた時は少なかった。特殊物<sup>6)</sup> っていうのは少なかったんですよ。で、ううん、やっぱりどうかなあ、30 過ぎぐらいか。その、色んな物を作って、まあ、注文が来るようになって。

この時に長実は、注文を受けた特殊物は外注することになる。その外注先は、時と場合そして注文内容それ自体によって様々に変わるとは思うが、信頼性を重視する長実は、いくつかの鬼板屋を選んでいるのが特徴である。長実自身の眼鏡<sup>めがね</sup>にかなった鬼板屋を選択し、藤浦鬼瓦の鬼瓦として、鬼瓦の価値を保証しているのである。この姿勢が長実が様々な取引先から信用を生んでいる一番の源泉であろう。長実は初期の頃から長く続けている鬼板師の名前を教えてくれた。

その、杉浦さんとか、まあ、高浜の、その、鬼屋さんとか、いろいろですけどね。

杉浦さんの方は、まあ、碧南の杉浦さん、杉浦<sup>ひろきち</sup>広吉さんって言うんですけども、その方に作って頂いた時代が長かったっていう事ですね。

かなり長い間、ううん、それが、かなり長い時代、うちとしては続いたんですけどね。新川町というところに住んでみえました。田尻ですけどねえ。

この杉浦広吉は㊤(マル五)という屋号を持つ杉浦五市と共に仕事をしていた職人だという。ただ白地組合には一時入っていたが、ほとんどは組合にも入らず、鬼瓦を作っていたようである。長実とは2004年のインタビューで、「杉浦広吉は高齢により、今年仕事を辞められた」と言っている。つまり、杉浦広吉は長実が特殊物の外注を始めた頃から最も長く取引をした鬼板師という事になる。

次の取引先が梶川亮治である。鬼亮という名前で現在活躍し、手作り鬼瓦にかけては三州鬼板師の間では第一人者である。



梶川さんは、なあ、何年ぐらいだろうなあ。やっぱ20年ぐらいかな、でも。20年ぐらいだと思いますけどね。

その、竜だとかね。ほんとの、ほんとの、特殊なやつを梶川さんが作られるということを知っていて、んで、まあ、発注するようになったんですけどね。

長実はまだ単に梶川亮治の鬼板師としての力量を見込んで注文を頼み始めたのだという。ここにも長実の経営の特徴をうかがうことが出来る。おそらく、通常以上の特殊な注文を長実が受けた時に梶川亮治と取引の関係が出来たものと思われる。

そしてもう一人長実が挙げている鬼板屋がカネコ鬼瓦である。鬼亮（梶川亮治）が黒瓦組合の鬼板屋であるのに対して、カネコ鬼瓦は白地組合に所属する手作り専門の鬼板屋である。藤浦鬼瓦の特徴がそのまま取引先の鬼板屋の構成に反映されている。

結局、白地組合員ということまで、あの、やっぱり、仕上げが綺麗。という事は聞いておるんです。傷が少ない。

やっぱり、実際は、その、焼いても傷が出ないんですよ。うん、鬼師さんでも、いろいろタイプがありますからね。

やっぱり、注文が、もう納期が迫っていると、作る人は傷が多いですけどねえ。もう、急激に、やっぱり、急乾燥されたりしますからねえ。

性格ですね。もう、だから、いい師匠に会えば、いいものが、ずっと伝承されるでしょう。うん。だから、やっぱり、鬼師さんでも、いい鬼師さんの、みんな、弟子が、みんな同じようにいい物を作られる。

見てるとね。

ここで長実本人の手作り鬼瓦について見てみたい。既に述べたように、五郎が亡くなった時、長実は中学三年生であった。その時点で長実が出来ていたことは石膏型から起こして、へらで仕上げる事であった。その時五郎は52歳だったので、もし、五郎が70歳ぐらいまで生きていたら、長実は手作り鬼瓦が出来る五郎直系の職人になっていたものと思われる。残念ながら現実にはそうはなっておらず、長実は中学三年を卒業すると、藤浦鬼瓦に入り、プレス機械を使って鬼瓦を生産する白地屋になった。ところが、長実が30歳を過ぎ

るようになった頃から取引先が増えて来たことと関連して、特殊瓦の注文が<sup>たびたび</sup>度々入るようになって来た。普通は外注に出すのだが、ある時、なぜか注文がそのままにしてある状態が起きるという事があり、それが長実を手作りの世界へと入るきっかけとなったのである。

「どうしても作って下さい」って言う事で。

その、注文に出せば良かったんだけど、たまたま、出してなかったんじゃないかなあと思うんですけど。

ある物を注文を受けて、あれは作ったんですけど。ちょっと大きかったんですけど。

とりあえず、初めて作ったのは、ええとねえ、一色の対米<sup>ついで</sup>っていう、そのお寺（長久院）に在るんですけど。まあ、それ、いまだに、多分載っていると思うんですけど。ううん。<sup>7)</sup>

それを作って、ああ、作る喜びみたいなものをねえ。それから（手作りを）やるようになったと思いますけどね。（第4図参照）



第4図 長久院 山門の鬼 9寸御所型ヌギ鬼鳥休み付 藤浦長実作

長実はこのようなきっかけを通して、手作りを開始したのである。ただ本格的に職人として修業を積んだわけではないので、柄振台とか、跨ぎ巴などのあまり複雑でないものが主

体になっている。

まあ、小さいものしか出来ないもんですから。小さいちゅうのか、その先ほど言った様な、名入りの柄振台、字入りの柄振り台とか、そういう巴とか、ごくごく簡単なものしか今はやってないですけどね。

前はほんと親父の作った、その、石膏型を起こしたりはしてたんですけどね。後は、見よう見まねです。

長実の場合は、五郎が早く亡くなったのに加えて、藤浦鬼瓦に職人がいなかったことが挙げられる。ところが五郎の手作りの技術は、長実の母親「やす」と、三女の姉「郷乃」が受け継いでいた。長実の手作りはその二人から来ているのであった。

姉さんとやりながらっていう感じですけどね。まあ、母親もずっと昔はやってましたからねえ。

(姉は)、やっぱり、親父が、あの、居る時に、ずーっと一緒にやってたからね。

三番目の姉さんなんですけど、その、それと一緒にずっとやっているから。

長実は手作りの喜びをプレス物と比較しながらその違いを語っている。そのどちらをも手掛けている職人としての長実の実感が直に伝わって来る。

やっぱ、プレスもんっていうのは、その、勢いが無いじゃないですか。まあ、中には、あるとも、ある、作品もあると思うんですけど。手作りはやっぱり、こう、そ、それだけやっぱり、こう、気が入って作るから。

石膏にしても、自分のところしかないという物があるもんで。

模様も見れば直ぐ分かる。

長野県の方に行くと、その、うちが作った、その、柄振り台の鶴と亀が、あの、付いている、柄振り台もあるんですけども。

あると、「あつ、自分が作ったのが残って、残ってる」嬉しさもあるし。

自分では何も、ほんと、力も何も無いんだけど…。(第5図参照)



第5図 鬼瓦 笑福貴人(翁) 藤浦鬼瓦事務所の屋根 藤浦長実作

長実の手作り鬼瓦への思いは、やはり、作った人のみを知る独特な「気」が込められた作品との繋がり深さを伝えている様に思える。親と子が見えない何かでしっかりと繋がっているような関係である。「プレス物からは「気」は伝わって来ない」と長実は語っているのであった。大量生産から生まれるプレス物には人が機械に製作過程の大部分を取って代わられており、「気」が込められる余地と機会がほとんどないに等しいといえよう。逆に、手作りの鬼瓦には作った人の「気」が込められ、それがいわば親子のような関係となって残ることになる。それゆえに力強い鬼師から作られた鬼瓦にはその「気」が入り、独特のオーラ(生氣)を持ち、見る人に感動を与えるのである。という事は、単なる形の良し悪し(プレスで可能)を超えて、鬼師自身が持つ「気」の大きさ、強さと、それを投射する技が、鬼瓦に多大な影響を及ぼすことになる。鬼瓦が持つ迫力または生氣は各々の鬼師が放つ「気」の量と質をそのまま顕現していると言えよう。

## まとめ

藤浦鬼瓦について色々と考察して来た。まず、藤浦鬼瓦は鬼福製鬼瓦所とは直接の婚姻関係にある鬼板屋である事が大きな特徴であろう。しかも、鈴木家の長女「きよ」は福松と、二女「かず」は五郎の父、藤浦宗次郎と結婚しており、五郎は鈴木家の血を引く従兄妹の「やす」と結婚している。その上、藤浦五郎が鬼福製鬼瓦所において、福松の職人であること。こういった二重三重に<sup>わた</sup>亘る深い繋がりが、この二つの鬼板屋に存在する。それ故、藤浦鬼瓦は鬼福製鬼瓦所から分岐した直系の鬼板屋であることを明白に示している。単なる職人が独立して始めた鬼板屋とは性格を大きく異にしている。

ただ本来ならこの直系の鬼板の技術や流儀が五郎から二代目の長実には藤浦鬼瓦において引き継がれるはずであった。しかし、正に引継ぎがこれからはなされようとする矢先に五郎が突然亡くなったのである。その時、長実には15歳であった。五郎52歳である。最も引継ぎがここで完全に断たれたわけではなかった。五郎の鬼板の技は、妻の「やす」と三女の郷乃に既に渡ってはいたのである。しかし、おそらく五郎は二人が女であるがゆえに完全には（または本気で）仕込んではいなかったのではないかと思う。長実がいたからである。

残された藤浦鬼瓦の人々は長実も含めて、危機をプレスの白地屋として乗り越えていくことになった。ちょうど日本経済が高度成長期に入らんとする時に当たり、時代に助けられて、藤浦鬼瓦は逆に成長を始めたのであった。しかし、ただ単に時代の波に乗っただけではなかった。長実が30歳になり、独り立ちする頃から藤浦鬼瓦は更なる急成長を始めたのである。その原因が藤浦鬼瓦の場合はユニークである。別に長実が営業活動を積極的にわき目も振らずに展開したわけでもない。また、長実が他の鬼板屋から修業を終え、立派な鬼板師になり、長実の作る鬼板が飛ぶように売れ始めたわけでもない。そうではなく、長実の仕事に対する信用・信頼度が仕事のたびごとに上がって行き、長実の信用それ自体が独特な顧客への求心力を持ち始めたのである。それ故、まるで偶然が重なるかのように顧客が顧客を引き寄せ始めるようになったのである。元々は碧南地域だけに市場を持つ鬼板屋であった藤浦鬼瓦が、いつの間にか全国に顧客を持つ鬼板屋に変貌を遂げていたのである。そしてこの変化の力が藤浦鬼瓦をプレス機械中心の白地屋から、それも残しつつ、手作りの黒地の鬼板屋へと大きく仕事の内容を変容させていったのであった。

藤浦鬼瓦は、白地屋が黒地の鬼板屋にいかにも変わるのかの興味深い事例を示している。その要が、長実本人が持つ人望と独特な長実式経営にあると思われる。事実、三州鬼瓦センターの時、経営の仕方の違いを理由に直ぐにやめているのが長実である。つまり藤浦鬼瓦は鬼板の技術において特に優れているのではなく、顧客に対する仕事の最終的な満足度において高い評価を得ている鬼板屋といえよう。

## 注

- 1) 「かず」は明治12年2月15日生まれで、鈴木家の二女であった。鈴木市郎平と「かい」の間に生まれている。享年は昭和29年2月5日である。
- 2) 「碧南国民学校」は現在の愛知県碧南市にある碧南高等学校の前身である。大正15年4月1日に創立されている。しかし、この学校は昭和16年(1941)に創られた小学校としての「国民学校」とは違う。碧南市の前身に当たる大浜村、新川村、棚尾村、旭村が共同で作った高等学校レベルの学校であった。当時の高等小学校の次に来る学校である。
- 3) 長実が生まれた頃、父五郎が入信したという。その宗教は大本教である。
- 4) 和瓦ともいう。本葺きの平瓦と丸瓦を一体化させた、波状のいわゆる日本瓦である。
- 5) 役瓦ともいう。並瓦(棧瓦)以外の屋根の様々な場所に置く瓦で、色々な形や飾りを持つ瓦をいう。鬼瓦もこの中に入るが、一般には独立して別に扱う。
- 6) 特殊瓦ともいう。別注品の瓦のことで、その為だけに使う瓦をいう。例えばオリジナルのものの復元などである。
- 7) 長久院は西条吉良三十四観音の第15番札所である。正式名称は天徳山長久院といい、愛知県幡豆郡一色町にある。なお長実が初めて作って納めた鬼瓦は長久院の山門の鬼としてなお健在である。

## 参考文献

- 石田高子 1983年 『葺のうた』愛知県陶器瓦工業組合。
- 駒井綱之助 1963年 『粘土瓦読本』彰国社。
- 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年 『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州白地製造組合。
- 吹田市立博物館 1997年 『達磨窯』吹田市立博物館。
- 杉浦茂春編 1982年 『高浜市誌資料(六)』高浜市。
- 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年 『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化伝承推進実行委員会。
- 高原隆 2002年 「鬼師の世界——三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247。
- 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189。
- 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132。
- 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎(1)」『文明21』第12号：113-165。
- 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎(2)」『文明21』第13号：155-175。
- 2005年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎(3)」『文明21』第14号：97-111。
- 2005年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号：183-208。
- 2006年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(2)」『文明21』第16号：93-116。
- 2007年 「鬼師の世界——黒地：丸市(杉荘), 萩原製陶所(1)」『文明21』第19号：55-72。
- ONIX 1992年 『鬼瓦総合カタログ』ONIX。